

表現（美術系）に関わる教員の 資質向上のための実践報告

——現代芸術教室「アートイズ」からの一考察——

The enforcement report for technical improvement of the
teacher about expression (fine arts)

——Consideration from a contemporary art classroom “ARToIS”——

飯田 竜太 佐貫 巧

要約 保育者養成校の表現（美術系）の科目に携わる教員は、必ずしも保育所や幼稚園などで保育業務に従事していた経験をもつ教員が担当するとは限らない。しかし、子どもの気持ちや発達段階、造形における基礎的な知識を、現場での実践を通じて学ぶ事は多い。保育者養成校の美術室を利用し、子どもから大人までの幅広い層の対象者を比較できる造形制作の機会を設定し、教員の質の向上を計る実践報告である。

1. はじめに

保育者養成校の表現（美術系）に携わる教員は、必ずしも保育所や幼稚園などで保育に従事していた経験があるものが全てではない。学歴や研究内容によって採用され、授業が行われてる。保育造形を学生に教えるうえで、対象である未満児や以上児と、関わった経験が少なからず必要であると考え。現に、多くの保育者養成校教員が保育実践を研究内容と照らし合わせるために、保育園や幼稚園におもむき、対象児との事例研究を多数行っている。このような状況において、問題であ

るのは、対象児と研究者である教員は、保育者と子どもという立場を取っていないところである。つまり、保育を行う環境の範囲外の人物と子どもは接点を持ち保育活動が行われるということになる。幼児の表現、特に美術や造形的な活動においては、この関わり方の関係性は保育活動を行う中で大きな弊害となると仮定する。これは筆者らが、幼稚園へ出向き、造形教室として月1回程度の造形活動を通じて考えるとところでもある。であるならば、造形教室自体を企画運営する事で、子ど

もとの実践的環境を設定し、より深く子どもとの関わりを構築する事ができ、保育者を養成する教員としての資質の向上を確保できる

のではないかとこの仮説をたて、実践する事とした。

2. 目的

本実践の目的は、幼児保育学科美術教員として、持続する教育の中から享受すべき教育の枠組みにとらわれず、幅広い対象を設定し、造形芸術を通じた教育のあり方を模索するものである。ここでいう教育の内容は、保育造形に関わるものであり、その枠組みにとられないという事が教育内容の更新につながると考えている。また幅広い対象者とは、幼児に関わらず、小学生から成人等の、今まで対

象にできなかった年齢層を指すものとする。幼児造形において、年齢別発達段階を考える事は指導計画を立案する際に非常に重要な要素となるが、年齢だけを理解しているのではなく、大きなつながりを持った範囲として造形芸術を通じた情操教育を行っていく事が、創造性のある生活を育み、人生を豊かにするものであると考える。この部分が枠組みにとられない幅広い造形的な活動を行う目的となる。

3. 方法

□開講回数と時間

毎週1回の開催日を設定し、本学休講日である土曜日をコアの開講日と設定した。月4回程度の開講を目標とする。運営資金は、

教材、運営費として一回1,000円(1開講分)とし参加保護者から徴収する。実施内容は1回の講座で完結させ、時間は1時間とする。

表1

① 9:00～10:00	② 10:30～11:30	③ 13:00～14:00	④ 14:30～15:30
ルーム1A	ルーム1B	ルーム2	ルーム3
年少～小学2年生クラス	年少～小学2年生クラス	小学3年生～ 小学6年生クラス	中学生～大人クラス

□プログラムについて

プログラムの対象年齢を、4歳～8歳(ルーム1)、9歳～12歳(ルーム2)、12歳～(ルーム3)の3クラス性に設定した。この年齢別

の根拠は、異年齢保育で教室を設定することで、年齢別の違いが分かりやすいという実施教員の研究的な側面と、異年齢保育における子どもの関わりがより見えやすいと感じたた

めである。これは、低年齢の子どもが、高年齢の子どもと同じ制作を行った場合、制作物が低年齢の子どもより、技巧的にも視点的にも優れたものがつくられるという個人的な経験による観点もある。この部分はこの実践を通じて検証していきたい。

また各回ごとで完結する造形制作活動であ

るため、活動時間を1時間に設定している。1時間以内で終了できないものも制作の内容によっても存在するため、事前の告知は概ね1時間とした。また活動内容が年齢別で統一されているのは、3つのルームがそれぞれ同じ活動を行う事でその差異を検証する事も目的となっている。

□プログラムの内容

各月ごとのプログラムの内容は、それぞれの活動のコアになる「素材・題材」をモチーフとして選択している。また「素材・題材」にはなるべく現代美術作家の方法と制作から引用するように心がけており、活動の中にそ

の関わりが持てるような授業作りを行っている。現代美術のセンテンスを含む事は、保育造形が年齢別に区切られるものではなく、全ての年齢層に何らかの影響を及ぼす要素を含んでいると仮定するからである。

ルーム 1	季節の課題を中心に1課題を作成していく。受講日によって内容を変更していく。内容を選択し受講する日程を選択することができる。
ルーム 2	一つ一つの作品を時間をかけて制作していく。物を作るだけにとどまらず、理論的に作品を制作する事も学んでいく。受講日によって内容を変更していく。
ルーム 3	個別作品制作を主な課題とする。受講日によって内容を変更していく。個別に対応し作品を制作を行っていく。

□プログラムの実例

5月から9月に実施された内容については以下の図に記した。各項目は、一つのモチーフとなるテーマや素材、表現方法や人物などに分けられ、そのテーマにそって年齢別に細かい活動内容が考え実施された。記載されている表題は内容が分かりにくいものがある。これは参加者がこれらの文章から活動を前向

きに想起されるよう考えたものであり、行為自体の名称とは異なる。行為や素材の詳細を明記しないのは、その素材や方法に何らかの経験や概念を持つ参加者のフィルターを取るためという要素も含まれる。このように長期にわたって活動が見渡せるようプログラムを構成している。

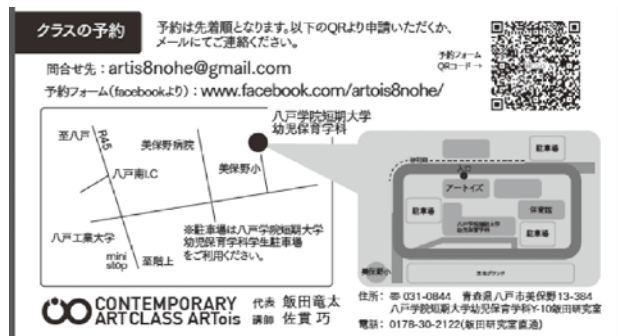
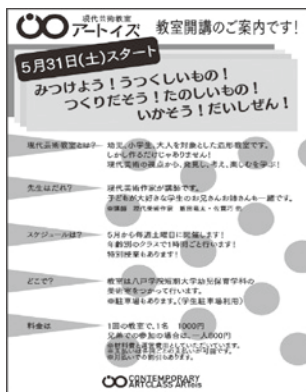
日付	5月31日	6月7日	6月14日	6月21日	6月28日
基本モチーフ	植物	技法	コラージュ	土	木工
ルーム 1	木を描こう	シャボン玉で描こう	ぬりえて遊ぼう	土から絵の具を作ろう	木の自動車を作ろう
ルーム 2	植物を描こう	妖怪を作ろう	コラージュで描こう	自分で絵の具を作り描く	木材で動くものを作ろう

ルーム3	植物のデッサン	デカルコマニー技法で描く	コラージュ技法で描こう	絵の具の材料と発色	木材を構成してみよう
日付	7月12日	7月19日	7月26日	8月2日	8月9日
基本モチーフ	ジャクソンポロック	粘土	光と影	浮力、竹	蜜蝋
ルーム1	ドリップングで描こう	自分のメダルを作ろう	影で遊び影を描く	水に浮くもの	食べられるクレヨンを作ろう
ルーム2	ジャクソンポロックになろう	粘土に描いてみよう	光と影の物語を描こう	浮力と動力 舟をつくる	蝋とクレヨン 自分のクレヨンを作ろう
ルーム3	染料でドリップング	粘土と石膏の関係	カメラの中に入ってみよう	竹でカトラリーを作ろう	蝋とクレヨン 自分のクレヨンを作ろう
日付	8月16日	8月23日	8月30日	9月6日	9月13日
基本モチーフ	段ボール	カメラ	綿棒	絵の具	—
ルーム1	段ボールで椅子を作ろう	自分でカメラを作りプリントする	綿棒で遊んでみよう	絵の具で描く	—
ルーム2	段ボールで椅子を作ろう	ピンホールカメラについて	綿棒でモビールを作ろう	絵の具と観察	—
ルーム3	段ボールで椅子を作ろう	現像とプリント	住まいを飾るモビール	見えているものと表現する方法	—

□運営に関わる広報活動

毎月4回の開催ごとにチラシを作成し、幅広い参加者が参加できるように、広報活動を行う。毎月、市内の保育所、小学校、文化施設などを中心に600ほどの場所に配布を行う。添付は第1回目に制作したチラシのデー

タとなる。各回ごと予約申請し、クラスを運営する準備を行うための人数を把握する事に努める。またwebサイトを独自に作成し、制作内容をアーカイブし、活動内容から次の活動への参加を促す。



□運営について

基本的な運営は、2名の教員が主となり、活動を行う。活動内容によっては、補助が必

要なため、幼児保育学科の学生複数名をボランティアとして採用し、活動の補助にあたる。また、外部の補助教員として、一般の

方のボランティアも受付、補助として活動を行う。

主となる教員は、なるべく子どもそれぞれが個別に考え、自由に発想し、表現できる空

間作りをめざし運営を行っているため、基本的に保護者の活動の介入はあまり行われないうように設定をしている。

4. 実施内容報告

上記プログラム実例に沿って運営が行われた。以下は各回の様子を示す参考写真となる。





5. 結

参加者は、14日間の合計で224名が参加した。

第1回目から第14回目まで全てに参加している参加者は1名のみに留まっており、各回ごとの内容によって参加者に変動があることが分かった。また夏休みや運動会などの年中行事により内容に関わらず参加者が少ない

果

開催日も見受けられた。

内容と参加者の反応は、1回の活動で完結する事から、その後の様子をヒアリングすることが出来ていない。そのため、複数回参加している参加者からのみ意見を聞くことができた。参加者からは、「普段、体験できない事を体験できる」「学校では教えてくれない

事を教えてくれる」などの、発見的な要素を多く含んだ言葉が聞かれた。このヒヤリングは、後期の活動において参加者全てにヒヤリングを行い、活動の振り返りや、目的に置ける仮説の検証を行う予定である。

時間配分に関しては、同じモチーフやテーマを設定する事で、年齢にあった活動に沿わせるよう見直してはいるが、設定自体に問題

があり、時間が非常に長くかかってしまう活動や、また非常に短く活動が終わってしまうものもあった。これは保育経験や実践における経験の少なさから来るものでもあるし、事前の準備不足や予測の甘さから来るものであると考えている。これに関しても、準備の段階から活動を精査、検証する必要がある事がわかった。

6. 考 察

この活動を実践報告としてまとめる事で、目的である保育者養成の表現（美術系）に関わる教員の質的な向上は期待できる事が運営を通じて感じられる。それはいくつかの理由から簡単ではあるが述べる事ができる。

まず運営の方法による部分で、1日に年齢の違った子どもを1時間ごと、同じモチーフやテーマに沿って活動を行う事でその差異を感じられる所にある。比較を通じて子ども個人の様子を理解する事は非常に重要な要素であり、文献の比較では区別する事ができない個人の仕草や教室の雰囲気、環境構成にいたるまで、その様子を検討する機会が存在している事が経験を重ねる上で必要であった事が明らかになった。また子どもを扱う保育者を育てる立場において、より明確な指導を行うことがこれらの環境の創出によって産まれた経験になっているところがある。特に幼児と小学生が同じクラスで行うルーム1に関しては、驚くほどの違いに当初困惑した。それは、活動の流れや言葉の理解が非常に異なっている点と、活動のスピードによる違いからであることが分かった。一つの発言において、よ

り多くを創造理解する事ができる小学生の側面と、より自由な発想を小学生よりも速くないスピードで行う幼児は対照的な比較検討の材料になるものであった。さらに小学生と大人に関しては、仕草や動作ではなく、顔色によってその理解や感情を表す所に、幼児との比較が見られた所だ。これは保育者を養成する立場に於いて、常に笑顔が必要である事や、子どもは大人の顔をよく見て発言し行動しているなどの、子どもの目線に於いても発見する機会となった。

次に活動内容についてである。活動内容は、1回の活動で一つの材料や題材、モチーフを選定し、そのモチーフを年齢に分けたクラスで方法や内容に変更を加え、運営を行っていった。当初は同じ制作物を指定する事で、各ルームごとに制作の完成度が変化するという仮定を立てていたが、活動に入る以前から指定した内容についての否定的な要素である、「できない」などの方法的拒否が見られた事が発見であった。これは幼児にも見られる反応ではあるが、小学生や大人を対象とした教室の中でも、このような様子が起こる事

は想定していなかった。幼児のクラスを行う際に、活動の導入は重要であるが、小学生や大人のクラスの方が、より完成に向けての導入や、方法に対する細かい説明が活動時間の中での重要な要素でありしっかりと時間を割く必要がある事が分かった。一つのモチーフやテーマを選定し遊びを通じた体験の中の細かい習得技術や、未発見の部分をより細かく指摘する事が、活動への満足度をあげるきっかけになっているのかもしれない。

この実践を今後1年続ける事で、教員自体の質の向上をさらに増進させる目的は変わらないが、テーマと活動の年齢別の派生によって変化する要素を研究する事が出来るかもしれないと感じている。また造形制作活動という『ものづくり』の現場に於ける、子どもから大人までの共通意識のようなものも感じることができたため、その部分に於いても深く研究できる余地を感じた。

参 考 文 献

- 1) 「身体と芸術」上村博 昭和堂 1998 年
- 2) 「幼児造形の研究」辻泰秀 萌文書林 2014 年
- 3) 「保育を開く造形表現」槇英子 萌文書林 2008 年
- 4) 「驚くべき学びの世界 レッジョエミリアの幼児教育」佐藤学 監修 株式会社 access 2011 年